

「青いランドセル」

木曜、三時間目の体育の授業は、ぼくの十一年強の人生のなかで、ワースト1だと言ってもいい。

まだ梅雨の明けきつていない六月末、かろうじて雨は降っていないが、湿度は限りなく百パーセントに近い。昨日の雨でぬかるみの残ったグラウンドで、昨年度から男子の体育を担当している春岡先生はるおかによって、あろうことかドッジボールをさせられた。

男子の半分以上は大喜びした。わざとぬかるみに跳び込んではいやいでいる生徒もいた。

が、ぼくには苦行以外の何ものでもない。

もともと運動神経が人一倍鈍い。さらに、それに追い討ちをかけるように、ぼく——〈御器所組〉組長の長男である御器所一はじめにボールの集中砲火を浴びせたり、わざと泥の中にコケさせたりする生徒もいない。

ドッジボールという競技にほぼ参加していないというのに、なぜか必要以上に疲れ切つて教室に戻った。

体育は全四クラスのうち、二クラス合同で行なわれる。四組のぼくたちは三組と一緒だ。ちなみに、男子は三組、女子は四組の教室で着替えることになっている。

見事に全身くまなく泥だらけになった不老翔太郎ふろうしょうたろうが、同じく泥まみれの顔面に笑みらしきものを浮かべて、

「おやおや、御器所君はずいぶんとスマートに立ち回つたんだねえ」

などと言いつつ放った。

なにか「おやおや」だ。この男にとって、決して皮肉でも何でもない。ただ、思つたことを口に出したただけだ——と、ぼくもようやく最近になって不老のことを理解し始めたような気がする。ただ、周りの人間はぼくが不老と友人だと思ひ込んでいる——もしかしたら不老自身も——というのが、歯がゆい限りだ。

「不老こそ、頭から水浴びてきたほうがいいんじゃないの？」

ぼくが言うと、不老は怪訝そうな面持ちになった。

「僕の運動神経を侮ってもらっちゃ困るな」

こいつ、本気か？ という問いは愚問だった。この男、泥水の中にヘッドスライディングしたような自分の姿に、ほんとうに気づいていないのだ。

その代わり、こいつは、おかしなことばかりに気づくのだが。

「トイレで鏡見てきたほうがいいよ」

ぼくはそっけなく言った。納得の行かない様子で、不老は四組の教室を出て行った。

なぜ、女子の着替えというのは遅いのだろう。いつも、廊下で待ちぼうけを食らうのは男子たちだ。

「早くしないと入っちゃおうかなあ！」

大声を上げたのは桜山俊介だった。

アメリカからの帰国子女だという噂は、噂ではなくほんとうのようだが、マナーは学ばなかったようだ。

結局、四時間目の始まるチャイムが鳴ってさらに五分近くたってから、女子たちによって四組は開放された。

担任の萱場先生も、この状況をわかっているのか、まだ教室に現れない。

そのとき、不意に前の席の川名亮が、つぶやくように言った。

「ど、泥棒……？」

川名亮は、背の低いぼくよりもさらに三センチほど低い。が、体重は二十キロ以上少ないので、しばしば五年生と間違えられるほどだ。

萱場先生の気まぐれとしか思えない突発的な月曜の席替えで、川名亮はぼくの後ろの席になった。

そのせいで、金銀河とは四列も離れてしまった。しかも、不老翔太郎と金銀河が隣同士になるとはどういうことだ。ぼくは我が身の不幸を呪うしかない。

「泥棒って？」

ぼくは、小声で川名に訊いた。

すると、川名はびくつと一瞬、震えた。川名亮が、ぼくに対して一種の恐れを抱いていることは気づいていた。五年生のときから同じクラスだが、今までまともに会話をしたことがないし、川名から話しかけてくることもなかった。

「いや……何も盗られてないみたいだし……勘違いかなあ」

「じゃ、どうして泥棒だつて思ったの？」

「いつもランドセルの蓋、ロックしないんだけど、今見たら、してあったから……」

ぼくたちの学校では、ランドセルは自分たちの机の横に引っかけるようになってる。なんとなく慣習として、机の右側——もつとも右の列のみ左側に——引っかけてぶら下げることになっていた。

川名の言う「ロック」とは、ご存じのとおり、ランドセルの蓋を閉じて底部の金具をはめ込み、九十度回して固定することだ。鍵が掛かるわけじゃないけ

れど、誰だつてふつうにやっている。けれど机の脇に下げたあとは、教科書やノートが取り出しやすいので、そのまま蓋を固定しない場合が多い。ぼくもまた、その一人だ。

ぼくは川名亮のランドセルを見やつた——青色のランドセル。

「今日に限つて、ロックしたとかいうことは？」

「そんなこと……ない……んじゃないかな」

自信なさそうに、川名は言った。

「あ、そういや、俺も！」

唐突に、背後から声が上がった。

いつの間にか、ぼくと川名の会話が聞かれていたらしい。身を乗り出してきたのは、桜山俊介だった。

「ほんとうに？」

どうも、このお調子者は信用できない。

「ホント、ホント。川名と一緒に。いつもは開けっ放しだけど、今はランドセルが誰かに締められてた」

「それ、間違いないの？」

不意に口を挟んだ女子は、もちろん——と言うべきか——金銀河だった。席替えて距離が遠くなつてしまったのがつくづくうらめしい。つい先週までは、隣同士だったのに。

桜山は、急にしどろもどろになった。

「べ、べつに、何も盗まれてないみたいだけど……」

「『みたい』じゃダメでしょ。ちゃんと調べなさい」

金銀河は、クールに言い放つた。ぼくには、とても真似できない。

このクラスで、いや、学年で、全校で一番の美人であり優等生である金銀河が発言したことで、一気に教室全体が騒然とし始めた。

「ホントに何も盗られてないんだよ。だからさ、俺のこと心配しないで——」

にやにやしていた桜山も急に真顔になつていた。

「べつに桜山君だけを心配してないけど」

金銀河は表情ひとつ変えずに答えた。一瞬で、桜山の表情が固まった。

学校に、財布や携帯電話を持つてきている生徒もいる。貴重品は、体育の時間には先生が大きな袋に入れて保管することになつている。

それは生徒なら誰でも知つてのことだ。けれど、なかには面倒くさがつてランドセルの中に入れておけばなしにしている生徒もいるかもしれない。

学校での事情を知らない泥棒が、外部から侵入したのだろうか？

「泥棒がこの教室に入って、盗るものがなくてそのままこっそり逃げた……っていうことかな」

自分の考えが、不意に口から外へ飛び出した。

考えすぎだ。どうやらぼく自身も「不老ウイルス」に感染しつつあるのかもしれない。

「ちよつと御器所君」

突然、金銀河がぼくに、その可愛らしい——というよりも綺麗な顔を向けた。でも、その眼は笑っていない。

「え、な、な、何？」

衆人環視のなか、金銀河に声をかけられること自体が珍しい。

「二人とも『ランドセルを開けられた気がする』としか言っていないじゃない？泥棒とやらが侵入した証拠はどこにあるの？」

「あ、あの、それは、えーと……」

駄目だ。もう舌が突っ張ってしまった。いつだって、金銀河の前で堂々と胸を張って発言なんかできない。

「あの……俺も、やられたかも……」

さらに、声を上げた生徒がいた。徳重直紀とくしげなおきだった。

「えっ、徳重君もなの？」

金銀河が身構えた様子で言う。

「いや、今日じゃなくて、火曜の体育のときだったんだけど……」

「火曜日……どうして火曜日なの？」

ぼくよりも先に、金銀河が問い返した。

「そんなの、わかんないよ……やつぱり体育の時間のあと、ランドセルのなか、誰かが荒らした感じだったんだ……」

「やつぱり、『感じ』に過ぎないじゃない」

金銀河に言い返せるような男子は、ほとんどいない。徳重もまた同様だった。

「俺……几帳面っていうか、ランドセルに入れる教科書の順番、いつも決まってるんだ。けど火曜日は、体育のあと戻って来たら、順番が変わってた……」

言い訳めいた様子で徳重直紀が答えた。

「徳重君の勘違いかもしれないじゃない？ ランドセルを開けられた証拠はあるの？」

「証拠って言われても……」

徳重直紀の声は尻すぼみになった。

「いいね、実に素晴らしい！」

唐突に、ドアのほうから声が聞こえてきた。

そうだ、この男が口を挟んでこ君ないのがおかしいと思ったのだ。

頭を大きな白いタオルで拭いながら、不老翔太郎が、白いTシャツ一枚で教室に入ってきた。片手にビニール袋を下げている。たぶん、汚れた体操服が入っているのだろう。

「頭を洗ったのはいいけど、タオルがないことに気づいてね、保健室で鶴里先生にお借りしたんだけど、実に吸水性に優れている。さすが愛媛県のタオルは違うね。今治市のタオルの歴史というのは明治時代に遡るんだけど——」

呆れ果てた。脱力して椅子に座り込んだ。

「不老君。わたしたちは今、とても大事な話をしてるの。黙ってて！」

尖った金銀河の声が耳に突き刺さる。

が、この宇宙でたった一人、金銀河の鋭利な言葉をやり過ごすことのできる人間が不老翔太郎だった。

「ははあ、このクラスで発生したかもしれない『窃盗未遂事件』のことだね。

廊下まで、銀河さんの綺麗なソプラノは聞こえていたよ」

金銀河が、毒気を抜かれた表情になった。

「人の声質とは面白いもので、よく通って遠くまで聞こえる声と、そうでない声があるんだ。おそらく声の周波数帯や波形によるものだろうねえ。ほら、あそこにいる御器所君なんか、一メートルという至近距離でも、僕の耳には聞こえない場合が——」

ああ、なんてこった。全校生徒でたった一人だけ、ぼくを笑いのネタにできるのも不老だ。

クラス全員の前で恥をかかせるとは……ほんとうにいい度胸をしている。いや「度胸が必要」ということすら、不老はいまだに気づいていないのだ。現に、クラスの九割が、不老の軽口に表情をこわばらせている。

——なんてこった。

また心のなかでつぶやき、ぼくは机に突っ伏して、両耳をふさいだ。

ふと気づくと、その不老翔太郎が、ぼくの前に立っていた。

ぼくは小声で言った。

「いったい何のつもりだよ、不老。少なくとも、学校ではぼくをネタにしないでよ」

「ネタ？ おそらく君が寿司ネタなら……あつさり味のエンガワ、しかも本物の『ヒラメのエンガワ』ではなく、回転寿司で回っている『カラスガレイのエンガワ』といったところかな。安くてあつさり味で、僕は好きだけどね。そう

そう、もちろんヒラメとカレイの見分け方は知っているよね」

褒められたのか、けなされたのかわからない。きつと、どちらでもないのだろう。

「残念ながら、知ってるよ。まな板の上に置いたとき、左を向くのが――」

すでに不老は、ぼくを向いていなかった。

「僕は『カラスガレイのエンガワ』ではなく、川名君に用があるんだ」

平然と不老は言つてのけた。

「川名君、ランドセルを見せてくれるかい？」

その口調には、いつも以上にいらさぜられる。川名はただ、長身の不老翔太郎に言われるがまま、机の上にランドセルを置いた。

不老は特にランドセルに触れることもなく、くるり、と教室内を振り返った。

「桜山君、徳重君、勝手に開けられていたというランドセルを見せてくれるかな」

一瞬のためらいのあと、二人がランドセルを持ち上げた。

「え、どういうこと……？」

金銀河がつぶやいた。ぼくも眼を疑った。

川名、桜山、徳重、三人のランドセルは、すべて青色だった。

「誰も何も盗られてない、っていうのが不思議ね」

放課後の廊下、金銀河が言った。腕組みをして遠くを見上げる金銀河の姿は、とても小学六年には見えなかった。

いや、見とれている場合じゃなかった。

「まだ犯人は、目的の物を見つけていないのかもしれないよ。まだ事件は続く可能性があるんじゃないのかな？」

ぼくが言うと、不老は大袈裟に肩をすくめた。ぼくに視線すら向けない。金

銀河もまた、遠くを見つめたままだった。

ぼくは続けた。

「犯人は、何か『お宝』が『青いランドセル』に隠されていることを知っていた。ランドセルの持ち主も知らない『お宝』がね。でも犯人は、目標が誰のランドセルなのかを知らなかった。そこで、誰もいない体育の時間を狙って青いランドセルを荒らした……って、考えられないかな？」

沈黙――なぜ、この状況で二人とも黙り込んでしまう？

そうか、やつぱり、ぼくは調子に乗ってしゃべりすぎてしまったみたいだ。

ホントに、ぼくはいろいろな真実に気づくのが遅い。言い換えれば「どんく

さい」のだ。ついつい調子に乗ってしまった。以前のぼくならあり得ない。——そうか、ぼくが悪いんじゃない。

気づいた。いや、前々から気づいていたことを、改めて思い出した。

こいつのせいだ。ぼくの眼の前で、ぼくよりも頭ひとつ分以上高い身長で、大股ですたすたと路上を滑るように進むこの男——不老翔太郎のせいだ。

「ほう、事件は続く、ね。僕はまったく逆のことを考えていたよ」

表情ひとつ変えず、不老は言った。

ますます、ぼくの神経を逆撫でする。

「逆に今日、御器所君の言う『犯人』とやらが、川名君か徳重君のランドセルから『お宝』を手に入れてたかもしれない。ならばもう終わりじゃないのかな」「どっちにしろ、犯人を捜さないと！」

ぼくは言い張った。

「そう、誰かが教室に入り込んでるなんて、不気味じゃない？」

珍しく金銀河がぼくに賛同してくれた。

が、不老は歩調を変えずに、昇降口に向かって進み続けた。

「ちよ、ちよ、ちよ、ちよと待ってよ。どうしてそんなに無視するんだよ？」

「もつとほかに、考えるべきことがあるんじゃないかな」

「例えば、何？」

ぼくは突つかかった。

「萱場先生は、なぜあんなに気まぐれなのか？」

ぼくは吹き出した。

「はあ？ それは前からだよ。萱場先生の性格なんだから」

「そうかな？ 何か心配事を抱えているかもしれない。体育の時間は春岡先生担当だから、その時間、萱場先生はフリーだったはずだ。でも、四時間が始まってから十分近くたってから、教室に来た」

「午睡ひるねでもしてたんじゃないの？」

ぼくは言ったが、確かに不老の言葉は胸のどこかに引つかかった。

つい数ヶ月前、給食への異物混入事件が起きたばかりだ——その事件も、ほんとうに解決したのかどうか、ぼくたちはいまだに知らない。

「さらに、つい今しがたの『帰りの会』も五分遅れで始まり、五分早く終わった。だからほら、一目瞭然。六年四組以外はまだ『帰りの会』の最中だよ」

金銀河が口を挟んだ。

「確かにそうかもしれないけど、今は不審者を探すほうが大事だと思わな

い？」

「ようやく、不老は歩みを止めた。」

「不審者ね。もしかしたら『不審』ではないかもしれない」

「どういう意味？」

「銀河さん、四組で青いランドセルを持っている生徒が何人いるか知っていますか？」

「えっ？ 数えたことないけど……女子も入れると……」

「六人」

素っ気なく、すぐさま不老は答えた。

「『ランドセルを物色された』と主張する川名君、徳重君、桜山君のほかに、あつた熱田君、たかつじ高辻さん、のなみ野並さんの合計六名。クラスの五分の一が青いランドセルを使っているなんて、『青色』は人気があるんだねえ」

熱田とは熱田博和。ひろかず。絵画部所属で、いつも教室では物静かな男だ。ぼくはほとんどど会話を交わしたことがない。

高辻美宇は、あまり目立たない女子だ。ちょっと茶色がかった髪は地毛らしい。いつも本ばかり読んでいる印象がある。

野並響子きょうこは、女子のなかでもっとも背が高い。そして、横幅もまた、広い。お母さんが声楽家らしい。遺伝なのだろうか、歌がとても上手だ。うちの学校に合唱部はないので、

この街の児童合唱団に所属しているという。

不意に金銀河が手を伸ばし、不老の肩を掴むと、ぐい、と振り向かせた。

——近い！ ちょっと近すぎる！

しかも金銀河のほうから行動を起こすとは……なんてこった。

「さあ不老君、白状しなさい。何を知っているの？ 何を考えてるの？ 誰がランドセルを物色したのか、もうわかっているんじゃないの？」

不老は、五十センチもない超至近距離にも関わらず、表情をぴくりとも変えず、肩をすくめるような仕草をした。

絶対的に日本人には似合わない仕草。けれど、不老がやるとそれほど違和感がないのが不思議だ。ホンモノの帰国子女である桜山俊介がそんなポーズをしたら、出来の悪いギャグだと思われて爆笑されるのが落ちだ。

「何もわかっていないよ。僕は憶測でものを言わない。真実を知るためには、事実を集めなければならない。そして、僕の持っている事実は、あまりにも少ない」

冷静に不老翔太郎は言った。

いや、そんなことはどうでもいい。何なんだ、このシチュエーションは？
不老と金銀河が超至近距離で——しかも金銀河は片手を不老の肩に置いて——
向かい合っている。いや、見つめ合っている。

——ああ、もうなんてこった。

文字通り、ほんとうに、その文字の通りに、ぼくという人間の姿は二人の視
界には入っていない。

「僕が持っている事実——川名君たち三人がランドセルを勝手に開けられたら
しい、と言っていること。そのランドセルが青色であること。萱場先生が授業
に遅れてくること」

「萱場先生はこの際、関係ないでしょ！」

金銀河が割り込んだ。

「そうかな？ すべての事象に偶然はない。ランドセルが全部青色だったのは
偶然だと思うかい？」

「飛躍しすぎ。お話にならない」

金銀河が諦めた様子で不老の肩から手を離し、昇降口へと歩き始めた。

「もう一つ、忘れてもらっては困るけど、偶然ではない事実がある」

「な、何が？」

ぼくは身を乗り出した。

「青いランドセルが物色されたらしい時間は、みな同じだった、ということ」

はっとした様子で金銀河が振り返った。

「あ、確かにそうね。もしも御器所君の言うように、誰かが青いランドセルか
ら『お宝』を取ろうとしているなら、体育の時間でなくていいんだ。音楽なら
音楽室へ行くし、理科で実験をするときには理科室に行く。でも——」

金銀河は、急に真顔になった。こんな金銀河も綺麗だ。

——いかんいかん。

どうしてもぼくの気持ちは脱線してしまう。

「それよりも、犯人がどうやって教室に侵入したのか？ 何を狙っているの
か？ 犯人をどうやって捕まえるか？ そっちのほうが大事じゃないの？」

ぼくは慌てて割って入った。

不老翔太郎はあくまでも冷静だった。

この男には美を愛でるといふ感覚が決定的に欠けている。いや、ほかにも人
間として欠落している部分はたくさんあるんだけど。

「僕にとつて大事なのは『フーダニット』じゃないし『ハウダニット』でもな
い。『ホワイダニット』さ」

またわけのわからないことを言い出した。以前にも同じような単語を口にしていたが、ちんぷんかんぷんだ。

突然、不老は立ち止まった。そして、ぼんやりと天井——正確にはその天井の向こうの空間——を見上げた。

「体育の着替えの時間……そして『お宝』……なるほど」
「何が『なるほど』なの？」

金銀河の声を無視し——そんな暴挙に出られる男子は不老だけだ——不老は、不意に昇降口に向かって駆け出した。

「急がなきゃ、失敬！」

何が「シツケー」だ。小学六年生が使う言葉か！

「不老君、犯人がわかったの？」

慌てて金銀河とぼくは追い駆け始めた。が、意外にも不老の足は速い。ぼくはすぐに遅れてしまった。

「その件じゃない。萱場先生だよ！」

金銀河は、呆れたように立ち尽くした。

「意味がわかんない……」

まったく同感だ。

「おっと、御器所君、交通費を借りるよ。一つアドヴァイスするけど、学校に大金は持つて来ないほうがいい」

不老が高々と掲げたのは、樋口一葉が印刷された紙幣だった。

ぼくは慌ててポケットを探った。財布から、五千円札が一枚なくなっていた。そして、あつという間に不老は姿を消していた。

——なんてこった。

奴は掏摸スリの才能まで持っているのか。もはや怒る気分にもならなかった。

「不老が行っちゃったことだし……その、えーと、ぼくたちだけで……」

ぼくの舌は、いつもどおりに硬直する。

が、金銀河の行動は早かった。素早く下駄箱へと向かった。

そこにはまさに青いランドセルを背負った女子——高辻美宇だった。高辻は金銀河を見ると、一瞬眼を見開くような表情になった。

「体育の時間のあと、川名君たちが『ランドセルを開けられた』って言ったでしょ」
「う、うん……それで？」

「みんな青いランドセルだった。だから高辻さんのものも開けられたのかもしれない、と思ったの」

「えっ？　そ、それって、あ、あたしのも……？」

明らかに高辻は金銀河に対して緊張している。頬が少々赤くなるほどだ。

「そう。だから、勝手に誰かに開けられた痕跡がないか、調べてみたいの」

「ぜ、全然そんなこと、な、ないはずだけど……」

「気づかないうちに、誰かがこつそりと何かを入れたり、何かを盗ったりしたかもしれないの」

「な、何かって……何？」

「それを調べたいんだけど……いい？」

「う、うん、う、銀河さんが言うなら、いいよ」

やや上気した表情で、高辻は背負っていた青いランドセルを廊下に下ろした。

女子の高辻美宇も、金銀河の前ではどこかぼおつとしてしまうようだ。

不意に当の金銀河ににらまれた。ぼく自身が、ぼおつとし過ぎていた。

「ちよつと何覗いてるの、御器所君！」

「はいい？　何？」

「もうっ、わからない？　どうして男子って生物は、デリカシーをかけらもちあわせずに生まれて来るのか、進化生物学的に理解できない」

「いや、そういう難しい話じゃなくて……えーと、青いランドセルが——」

「ぼくの言葉が聞こえているのか、いないのか、金銀河はぼくを見下ろした。

「女の子の私物を覗くなんて、ホントに最低！　エッチ！　ドスケベ！　ヘン

タイ！」

——なんてこった。

言いがかり以外の何ものでもない。

どうして女子のランドセルの中身を見るだけで「ヘンタイ」扱いされなきゃいけない？

——なんて言えない。

金銀河に面と向かって反論できれば、ぼくも多少は金銀河から、まともな扱いをされるのかもしれない。しかし残念ながら、ぼくにはその度胸がない。かと言って、不老翔太郎のように、何も考えない超越的な鈍感さを持ち合わせてもいない。

泣きそうだ。

「確かに、大丈夫みたい」

金銀河の声が聞こえてきた。

「そ、そうだよ。あ、あ、あたしのランドセル、誰かが触ったら、こ、怖いよ……」

緊張気味の高辻美宇の声も耳に入ってきた。

「あのお……」

ぼくは声を挟んだ。

「……もう、いいかい？」

コンマ二秒後、眉間に皺を寄せた、金銀河の冷徹な視線がぼくを貫き通した。「御器所君……ふざけてるなら、帰ってくれない？」

限りなく絶対零度に近い声。

「いや、ふざけてません……」

相変わらず硬直する僕の舌——しかし、もう少しこの眼で見られたい、この声をおつけられたい……などということは、決して誰にも言えない。

「確かにランドセルは無事みたいね。ごめん、時間取らせちゃって」

「で、でも……誰かが、き、教室に侵入して、人のランドセルを探ってるなんて……な、なんだか怖いし、ミステリ小説みたいね」

明らかに憧れの視線で、長身の金銀河を見上げている。

「そう！ ミステリ！ 誰か真犯人がいるはずだよ。だから、ぼくたちが犯人を見つけ出してみせるよ！」

勢い込んで言った一・五秒後には、激しく後悔した。

無言の金銀河と高辻美宇。二人の女子のドライアイスのような視線。グサグサと突き刺さる。二人分なら、ダメージもより大きくなる。二倍ではなく、

一・六倍くらいだ——高辻美宇には申し訳ないけれど。

「でも……」

その高辻美宇が口を開いた。

「真犯人はわからないけど、なんとなくその気持ちは理解できるような気がする」

いつも先生に指名されても小声でしか話さない高辻美宇が、珍しく声を張っている。金銀河を真剣な表情で見ながら。

「そうね……もしかしたら、この事件の真犯人は探さないほうがいいのかもしれない」

金銀河もうなずいている。

「はいい？ 全然、意味がわからないんだけど……」

なけなしの勇気を振り絞り、おそろおそろ口を挟んだ。

「男子は黙ってなさい！」

にべもない金銀河の返答。

確かに六年生になってから、金銀河と会話をする機会が増えたのは事実だ。

五年生までは、ほぼ皆無だった。

そして今、金銀河から何度も罵倒の言葉を浴びせられている。嬉しいような、哀しいような……

——いや、嬉しいはずがない！

自分に言い聞かせる。

その瞬間だった。ふと、不老翔太郎が体育の時間のあとに言った台詞を思い出した。不老は、すでに何かに気づいていたのだろうか？

もう一度、ボロ雑巾を絞るように、ぼくの内部に残った勇気を絞り出す。

「あの……高辻さん。『なんとかダニット』っていう言葉、聴いたことある？」

すると、高辻美宇は、ぼくを頭の上から爪先まで眺めた。

「御器所君……結構、本を読んでるんじゃないの？ 探偵小説とか……好きなんでしょ？」

高辻は、廊下に眼をやり、定まらない視線のまま、ぼくに向かって訊いた。どきつとした。

ぼくは「推理小説」ではなくて「探偵小説」と呼ぶ人を無条件に信頼することになっている——もつとも、今まで出会ったことがなかった。

「え？ 読書は好きだよ、探偵小説も」

「だったら……どこかで読んだことない？ 探偵小説の、ジャンルを分ける言葉。『フーダニット』は『誰がやったか』。つまり『犯人探し』っていう意味なんだけど」

「あ……それは、なんとなくわかる。でも。ほかの『なんとかダニット』は……？」

と言った直後に、急に心拍数の増加を感じた。

——もしかして、ひよつとして？

高辻美宇って、ぼくのことを……好きだったりするのかな？

三年生のときに同じクラスになったから、今年で四年目になる。そのあいだ、一度たりとも、高辻美宇のことを女子として——つまり「好きになる」とか「恋愛対象の女子」として、見たことがなかった。

でも、高辻美宇のほうは、ぼくを「恋愛対象になる男子」として見ていてくれたのだろうか？

——まずい。

急激に全身の汗腺から汗がにじみ出てくる。高辻美宇の横には金銀河がいるというのに。

今まで何とも思っていないかった高辻美宇という子が、突発的に存在感を増して、ぼくの心臓に限りなく近い辺りに迫ってくる。

もし、高辻美宇がぼくのことを好きだったら？

どうすればいいんだろう？ さっぱりわからない。誰もぼくにそんな対処法を教えてくれる人はいない。困った。大いに困った。

——なんてこった。

こんなとき、男として、どんな表情でどんな返答をすればいいのだ？

ちよつと体を斜に構え、腕組みをしつつ人差し指を立てて唇に当ててみた

——誰かの姿に似ているような気がする。誰だったろうか……？

——あ、不老だ。

ますます落ち込んだ。

「何してるの、御器所君？ 唇でも乾いてるの？ こんなジメジメした天気なのに」

金銀河が、両手を腰に当てて、ぼくを見下ろしていた。一気にぼくの両肩が落ちた。

「多少は英語知ってるでしょ」

「は、は、はい？」

金銀河のこういう声を聞くと、相変わらず間抜けな返答が出てしまう。これはもはや条件反射になりつつあるようだ。

思わず、ちらつと高辻美宇のほうを見やる。

「『ホワイ』とか『ハウ』とかの意味を考えてみればいいだけじゃない」

「あ、はあ、なるほど……」

言いながら気づいた。さつきぼくから樋口一葉を一人誘拐した不老翔太郎も、金銀河も、それに高辻美宇もまた、犯人がわかったのだ。

しかも、その犯人をかばっている。

——なぜ？

気づくと、金銀河と高辻美宇の姿はなかった。

慌てて追い駆けた。

しかし、もう二人の姿はどこにも見えなかった。

どこまでも深く落ちていきそうだ。早く帰って、母さんの作るおやつを食べたい。糖分を補給したい。たぶん、今日はヨーグルト・ムースだと思うけど……

…

——ダメだ！

慌ててかぶりを振る。

これは、ぼくの事件だ。

不老が興味を見せず、金銀河も犯人をかばっているのなら、ぼくが解決するしかない。

それで多少の面目を施してもバチは当たらないだろう。これまで、さんざんな目に遭っているのだから。

——じゃあ、何をすればいい？

いつも、不老についていくうちに……いつの間にか事件は解決していたり、事件そのものが存在していなかったり、なぜかぼくが犯人に仕立て上げられたり……。

思い返すと、ますます気分がへこんでくる。

——考えろ。

自分の脳味噌を「青いランドセル事件」に向ける。

その一、今まで「犯人」は「青いランドセル」だけを狙っている。

その二、「事件」はすべて体育の時間に起きている。

その三、不老翔太郎も金銀河も、おそらく犯人を知っている。

その四、この「事件」の鍵を握る一人は、萱場先生である。

じゃあ、ぼくはまず、何をすべきだろうか？ 不老だったら——と思いかけて、頭を左右に振った。

——どうして不老のマネをしなきゃいけない？

洗濯機で脱水するかのようには、不老の顔を振り払った。

まず、いちばんの謎は、誰が何と言おうと——何ダニットだろうとも——真犯人だ。

体育の時間中、教室に侵入できる人物は誰だろう？

生徒たちは授業中だ。けれど、トイレに行くフリをして教室に入ることはできる。

——けれど、なぜ体育の時間に限るんだろうか？

そのときだった。

ぼくの脳細胞——何色か見たことがないからわからないけれど——に、電撃が走った。

先生だ。

授業のない先生なら、教室に出入りするの簡単だ。では、どの先生だろう？

またしても、脳細胞に電撃。ああ、なんて今日のぼくは冴え渡っているのだ

ろうか。

——萱場先生。

理科室の実験の授業も、音楽室での授業も、萱場先生が受け持っている。

しかし、体育の授業は違う。ぼくたちが春岡先生にしごかれていたあいだ、萱場先生は授業をしていない。萱場先生なら、職員室から出て、教室に忍び込み、青いランドセルに隠されたお宝を探すのは容易だ。

では、「お宝」とは何だろう？　そして、なぜ萱場先生はそんなに大切なものをランドセルに入れたのだろうか？

おお、我が虹色の脳細胞！

自分のことながら、己の潜在能力に震えてしまう。そうか、ぼくにはこんな才能があったのだ！

萱場先生は、意図的にランドセルに「お宝」を入れたのではないのだ。

アクシデントで入ってしまった——ちようど「青い紅玉」が、たまたまガチヨウに飲み込まれてしまったように。

では、その「お宝」とは何だろう？

偶然にもランドセルに入ってしまったもの。そして、最初にランドセルを開けられた徳重も、ほかの誰も気づいていないということは——やつぱり「青い紅玉」のような、小さな宝石のようなサイズのものではないか。

——実に鋭い推理力だ！

ぼくにこんな力を持つているとは気づかなかった。もしかしたら、ぼくは名探偵になれるんじゃないか？

我が虹色の脳細胞が活発化していく。ジンジンと痺れるのを実感する。

よし、いいぞ、もつと考えろ。「お宝」の正体を突き止めるんだ。

萱場先生のお宝——それは、萱場千種先生という人間を考えれば手がかりが掴めるんじゃないか？

萱場先生といえば「四十路近いのに独身。モテない女性教師」として、職員室で、ほかの先生たちにネタにされていることが、生徒たちのあいだでも知られている。

ぼくは、決して萱場先生がブサイクだとも思わないし、性格の悪いイヤな先生だとも思わない。

けれど、なぜか縁遠い……らしい。

けれど、萱場先生自身がそれを気にしている様子もなさそうだ。少なくともそんな様子を見せたことがない。

もちろん、ぼくたちの見えないうところで恋に悩んでいたりするのかもしれない。

ない。

——ああ、大人ってメンドくさい。

考えているうちに、イライラしてきた。大人なんだから、萱場先生もハッキリとさせればいいのに。

と同時に「いじめはいけません」とぼくたちに説教する先生たちは、萱場先生を「ネタ」にして陰で嗤っていながら、恥ずかしくないんだろうか。

なんだか急速に腹が立ってきた。

ぼくの家の「家族」のみんなは、決して血がつながってはいない。いちばん仲がいいノリ兄ちゃんも、ほんとうのぼくの兄じゃない。ジンさんだって、ゲンジさんだって、若水さんだって……みんなとても仲がいいし、結束が強い。

それがぼくの家——〈御器所組〉だ。

どうして、一人前の大人たちのあいだで「いじめ」なんかが起こるのか、ぼくにはまったく理解不能だ。

おつといけない、萱場先生に考えを戻さなきゃ。萱場先生が隠したお宝は何か？

しかも、それはぼくたち生徒にバレないように取り戻さなきゃいけないもの——もうバレてしまったけれど。

やはり、寶石のようなものなのか？　しかし、先生が学校にそんな大事なものを持つてくる理由がない。

いや、待てよ。逆の発想をしたらどうだろうか。

萱場先生にとっては、嬉しくも何ともないもの——むしろ、手元にあっては不快なもの、あるいは恐ろしいもの。

——おお、感じるぞ、このパチパチとした刺激！

我が虹色の脳細胞！　キラキラと輝いているじゃないか！　ホントに、ぼくは推理について天賦の才を持つているのではなからうか？

——自分の才能が怖い！

萱場先生は、持つてはいけないものを手に入れてしまったのだ。が、急いで手元から離さなければならぬ状況になってしまった。そこで、手近な生徒のランドセルのなかにこっそりと隠す必要に迫られた。

例えばそれは……何だろう？

そう、学校の不正だ。

例えば、毎週月曜の朝礼で、死ぬほど退屈すぎる話を長々とする校長先生が、習字道具や図工の絵の具、音楽のリコーダーなどの物品納入の業者から、キットバックを受け取っていた——その証拠書類を、萱場先生が偶然、入手してし

まった。いや、書類ではないかもしれない。パソコンのUSBフラッシュメモリの小さな小さなメディアにコピーして、職員室から持ち出したのかもしれない。

あるいは、いつも男子生徒たちには威張り散らし、ちよつと廊下を駆け足で通っただけで怒鳴りつけ、いつぼう女子生徒を鼻肩して、ニヤニヤしている教務主任の守山先生かもしれない。もう五十歳を過ぎた守山先生が若い女性と不倫している証拠を見つけてしまった——それをネタに何者かに脅迫されていることを、知ってしまった……

あるいは——

「やあ、御器所君、ずいぶんとのんびりとしたご帰還だね」

不意に鼓膜を揺らす、よく通る声。ぼくは、はつと我に返った。

——なんてこった。

いつの間にか、我が家の正門前にたどり着いていた。あやうく通り過ぎるところだった。

よくよく周りを見れば、太陽もかなり傾き、オレンジ色の残光が建物のあいだから見える。チビのぼくでさえも、長い影を地面の上に伸ばしていた。

普段なら十五分程度で帰宅できる道程を、ぼくはエネルギーを虹色の脳細胞の活動のために、一時間近くもかけて歩いていたらしい。

——まったく、ホントになんてこった、だ。

無論、ぼくを呼び止めた声の主は、不老翔太郎だった。

防弾仕様チタン合金製の我が家の正門にもたれて、すずしい顔をしている

——間違はなく、うちの家の「若い衆」の誰かが監視カメラでその姿を見ているはずだし、不老自身もそのことをわかっているはずだというのに。

〈御器所組〉本部前で、こんなにあげすけで無防備な行為をできるのは、世の中広しと言えど、不老翔太郎以外の誰にも不可能な所業だ。

「学校からまっすぐ帰って来たのだとしたら、これはこれは、ずいぶんとんびりとした歩行速度のようだね。一般に、成人の歩行速度が時速4キロと言われているから、我々小学生は時速3・5キロ程度と考えていいだろう、特に御器所君のような体型の場合は、もっと遅い可能性が高いね。じゃあ、時速3キロと見積もろうか」

「よけいなお世話だよっ」

嫌味のつもりだった。

が、不老翔太郎という男に通じるはずもない。

「すると、分速は50メートル。秒速ならば……0・8333……メートル。

君の場合はさほど脚が長くないので、おそらく一步の歩幅は40センチといったところだろうか。すると……一秒間に2・0833……歩。ほう、これは実に興味深いじゃないか？」

不老は満面の笑みを浮かべていた。

「全つ然、興味深くないけど」

「君は一秒間に約二歩しか歩かない。僕はまともな小学生で、そんな歩き方をする人知らない。興味深いなあ、御器所君、君は貴重なサンプルかもしれないよ」

あきれて返す言葉もない。いったいぜんたいどつちが「貴重なサンプル」なのか。

ほとんど音を立てることなく、防弾チタン合金製の正門が、ゆっくりと開き始めた。

「青いランドセル」(後編)へつづく